西秋：動物の研究と植物の研究の連携をどうとっていくのか？

姉崎：作業自体は各々行うが、重視している時期などは同じなので研究姿勢は変わらない。

西秋：どのように成果を一致させるのか、それは考古学者の仕事だろう。

姉崎：そうだろう。石器などで。あと、PPNB 前期においては動物骨が少ない。後の時期では多いので、年代的精査が行われればよい成果が得られると思う。

常木：イノシシの重量が大きいとはどういうことか？

姉崎：立地、生態環境がよかったためか。集落近くに残飯をもとめて集まることもある。やりとり、里のような状況があって栄養状態がよかったのではないか。人間は罠を仕掛けるだけで容易に狩猟できた。イノシシは飼育しなくとも大丈夫な動物。現在よりもやや気候が湿潤だったこともあるかも？

前川：イノシシは家畜化されていないと考えるのか。

姉崎：その意図を測るのは難しいが、人とは生息域が異なるヤギやヒツジとはまったく異なると思う。イノシシは寄り付いてくるから捕まえやすい。したがって、容易に生態を変えることができる。そのような環境がテル・エル・ケルクの周囲にあったのかわからないが。

常木：イノシシは、家畜化した時期に言及しづらい動物であるということか。

姉崎：そういうことになる。ただ、PPNB 後期 4～3 層において家畜化した蓋然性がある。

佐藤：セミ・ドメスティケーションのようなものはあったのか？

姉崎：基本的にはセミ･ドメスティケーションという用語自体まちがいであると考えている。意図的な繁殖は微妙であると思う。体のサイズは小さくなる気がするが。ただイノシシに関しては、意図的な繁殖を行っていたかどうかはあやしい。

西秋：どれくらいの期間で小型化するのか？

姉崎：意図的に繁殖したとすれば、2-3 世代程度。おそらく 10 年くらい。

前川：イノシシに関しては捕獲しようとすればいつでも捕獲できた？

姉崎：彼らはイノシシの生態をかなり熟知していたと思われるので、いつでも捕獲可能だった。

藤井：各時期によって分類しているが、時期によっては標本数がかなり少ないのでは？

姉崎：そうですね。L10 において特に少ない。

西秋：湿地なのにガゼルがいるのはどうしてか。

姉崎：今はいない。

西秋：ハッサケにはいる。

藤井：盆地で湿地だから他とは違うのでは。

姉崎：そう。ヒツジやヤギがもっと早くからいてもよいはずだが。アレイはもっと早い時期からあります。盆地の中でもそうした地域差があるようだ。

藤井：こういうことがビシュリでもできれば。

姉崎：そう思う。

藤井：遊牧していたらウサギなどが多いのでは。そういうことができればおもしろい。

常木：ウサギはいるか。

姉崎：数的には微々たるもの。

藤井：定住農耕民でやっている分析だが、遊牧民はヒツジなどは商品なのであまり食べないし、遊牧民ではそもそも骨が出土しないのでは？動物だけでなく、植物遺存体も。

西秋：ビシュリ調査が可能であれば、どなたが現地に行くのか？

姉崎：本郷さんは確実に。私も調整中。